

保育実習の諸問題——(1)——

——実習日誌から考える——

三角 同

(昭和63年9月30日受理)

The Issues of "Nursing Practice" ——(1)—— ——Concerning a Review of "Practice Diary" ——

Hitoshi MISUMI

(Received September 30, 1988)

はじめに

私が、本学の児童学科・保育科に就職して、すでに10年余になる。就職した当時、本学科の学生というのは、画一化された、いわゆる「保育科」という学生たちであったような印象であった。

時を経て、現在の学生たちをみると、他学科の学生とみわけがつかないほど、一人一人が個性をもった学生になってきているように思う。良し悪しをいっているのではなく、おそらく学生の多様化のスピードが私自身の対応よりも、はるかに速いと思わざるを得ない状況になってしまっているのではなからうか。そのような学生たちの変化に何とか対応しながら、「福祉」について語り、考えてきた日々であった。

そうした学生を前にした時、教員側として何をなすべきか。その一つの試みとして、筆者の担当している短大、保育科の「養護原理Ⅱ」の授業形態を発表したことがあった¹⁾。

福祉研究室としては、この科目のねらいを次のように定めた。

「この科目は厚生省指定の保育養成科目として、主に『福祉施設』での保育を志望する学生に対して、福祉施設をめぐる問題について概観することになっている。けれども本学保育科のように、幼保の一元的養成を志向している場合、さらには、幼・保・施への就職教育としては、むしろ、大学教育の一環としてこの科目をとらえるならば、我々は福祉を広くとらえ今の社会の中で、どう生きていったらいいのかを考える機会としたい」(本学、養護原理Ⅱ、履修者案内より)。

児童福祉第1研究室

それは、「人はいかに生きるべきであるのか²⁾」、ということであり、本学の福祉教育の究極の目的でもある。

毎年、一つのテーマの中で、いろいろな先生方に「講演」をしていただいている。心理系・体育系・医学系・美術系・教育系と、その領域はさまざまであった。しかし、一つのテーマの中で、枠にとらわれず、自由に話していただく中で、先生方の日頃見られない人となり、ご自身の領域以外の興味をもっておられること、それらがなまぜになつての「講演」であったように思う。

そうした福祉研究室としての仕事の流れの中で、やはり気にかかるのが、保育実習をとりまくいろいろな問題であったといえよう。

1. 関わりとしての実習

本学、児童学科・保育科では、5年ほど前まで、教育実習の担当は、専任の全教員がグループに分かれ担当するというようになっていた。

その当時、筆者も保育実習グループの一員として、短大生の1クラスを担当し、50名ほどの学生と週一回、通年でクラスでのオリエンテーションを行ったり、全クラス共通で、外部の先生方の講演をうかがったりした。そして、必要に応じグループごとの教員間のミーティングも行ってきた。

この様な動きの中で、筆者にとって有難かったことは自分の「担任」するクラスの学生把握が、不十分ながらも、理解しやすい状況にあったことである。

しかしながら実情は、大学での学習、日常生活からの「学び」等々総合的な「体験」の場であると理解してはいるながら、正直なところ、大変に不安であり、また、負担でもあった。

そのような中で、数年前ある学生が「大学の3年間の授業より、10日間の施設実習の方が、はるかに勉強になった」と、実習反省会で発言した。その通りであると思う。

気になったのは、発言内容よりも、こうした学生の「生」の声がはたして「日誌」にどのように反映されているのか、ということであった。そしてもうひとつ、「実習日誌さえなければ、楽しい実習であったのに……」という声の多さであった。

「日誌」とは、学生にどのような意味をもつのであろうか。「日誌」の本来の意味はなんであるのだろうか。

そうしたことが、きっかけになって、定例の研究会に出席することになった。その中で話し合われたことは「保育実習の展開」—その2—実習日誌をめぐる³⁾—で、すでに発表されている。

その要旨として述べられていることは、1)なぜ書くのか。2)どう書くか。ということに力点がおかれているように思う。

「日誌」は、事実を述べなければならぬ。しかし事実とは、おそらく、本人が感じた以上のものであるはずがない。事実を克明に記述すれば……。どこを、どう読みとるか。つまり「事実のどこに躓づいたのか⁴⁾」が、「日誌」の間われるところであるのだろうか。

2. 表現の場としての「日誌」

そうしたことが未解決のまま実習体制が変わり、「実習専任」以外の全ての教員は、実習からとりあえず離れることとなった。その時は、実習担当から離れることができ、「ホッとした」のが実感であった。

しかし、実習担当を離れてみて判ったことは、学生が何を考え、どうしようとしているのか、それを理解することが難しくなった、ということである。

この頃、「子どもと保育研究会」の話し合いのテーマが、「実習日誌・評価」の問題であったように記憶している。

その話し合いの中、メンバーのある先生から、「私達は、実習生が日誌に書かなかった、書けなかったということ、知らなければならぬのではないか」という発言があった。

実習担当をしている当時、日誌と反省会での声の食い違いを実感していただけに、あるいは、学生の「ホンネ」ということを考えていただけに、この発言は大変重いものとなった。そして、日誌と反省会での声の谷間にある

「ホンネ」の部分が「日誌に書けなかったこと、書かなかったこと」なのではないだろうかと思ってしまった。

そこでこのアイデアをかりて、本学でこのテーマ、「実習日誌に書けなかったこと」をレポートに書いてもらったら、どの様なものが提出されるのだろうか、という期待と不安のないまぜになった状態の中で、何かが見えればと、ここ3年ほど児童学科3年「養護内容論」保育科2年「養護内容」履修者に、この課題を提出してみた。

レポートの内容は様々であった。課題の大まかさということも当然あったと思う。「書けなかったこと」を、実習生個人の「グチ」と勘違いしている学生も多々あった。それらのレポートの中からどのレポートを資料とするかは、筆者の主観によるものとした。

年を追うごとに、文字による表現ががてな学生が増えていくように思う。もう少しいえば、表現そのものをしていない学生たちといえるのかも知れない。実習受入園の先生方のお話しにもよくでてくる。曰く「積極的ではない」、「何を考えているのかわからない」等々。そこには、学生から質問がないという背景がある。日誌にも書かない、口でもいわない。どこに学生たちの「ホンネ」が隠されているのだろうか。

この問題については、すでに何回か発表の機会を得ている⁵⁾。最初の発表の結語を今でも憶えている。

「失なったものは大きかった」。

つまり、あれだけイヤがっていた実習担当を離れてみたら、学生が見えなくなっていた。という事実だけがいま残っているということである。

実習日誌に「書けなかったこと、書かなかったこと」がホンネであり、「書いたこと」がタテマエであったとしたら、我々養成校に生きる人間は、絶えず学生のタテマエに付き合っていかなければならぬのだろうか。そして、ここに述べる「実習日誌に書けなかったこと」のレポートも、タテマエであったとしたら。

3. 実習日誌に書けなかったこと

(1) 職員と子どもの関係

イ) 私が実習させていただいた保育園は、やたら先生は子どもを叱ります。例えば、食事については、食べるのが遅いと、他の部屋に無理矢理連れて行ったり、こぼすと、次の食事からその子のテーブルの下にだけ新聞紙を敷いたりもするのです。保育園の

場合、時間が決められ、それに合わせて行動をするので、こういうことが出てくるのではないかと、とも思うのですが、食事というものは、生きるために一番大切な事で、精神的にも安定した状態で、消化の良いようおいしく食べるべきだと思うので、やはり、この状態とは全く逆になる保育園の指導の仕方には疑問を感じます。

叱るということ、食事の件。このふたつについては、多くの学生が、ひっかかりをもっている。

ロ) Mが食べるのがおそく、グズグズしていたので、私がちよっと話しかけたら、今度は違う保母さんに“おねえさん、この子気にしなくていいわ、いつもこうなんだから……”といわれた。

実習中、何度かこんなことがあった。私はその度にMに対して「無視」という態度をとるようという保母に腹がたったし、“なんでそんなことをしなくてはならないのかな……”と疑問に思った。

ハ) 養護施設で働いておられる保母さん、指導員の先生方が、毎日大変であるのは、10日間の実習でも本当によくわかりました。しかし、もう少し子どもに優しく接してあげてもよいのではないのでしょうか。集団生活においては、ほんの少しの甘えも許されないものでしょうか。

学生たちは、明確にはないけれど、だからこそ素朴に状況を見ているようである。しかし、時としてその素朴さは残酷でもある。施設の側からすれば「これ以上どうせよというのか」という声を上げたいのかも知れない。

(2) 職員と実習生の関係

イ) 信じられなかったのが先生の言葉だ。「○○ちゃんはひきとられるみたい。まったく、いい子ばかりひきとられていくのよねえ。残るのは悪いのばかり……」と言ったのだ、自分の耳を疑った。先生がどういうつもりでいったのか、今でもわからず、この言葉はおそらく、ずっと私の胸の奥に残ることだろうと思う。

ふとしたことで、学生は傷つく。実習生自身に向けられた言葉もさることながら、子どもが傷つくことで、学

生自身が傷ついていく。

ロ) 先生方は、皆若い人ばかりだったので良かったと思っていたが、意地悪な先生方が少々いて、ムツとする事があった。

寮に残っている幼児さん達と遊んでいると、その子の担当の先生が来て、「○○ちゃん、こっちにいらっしやい」といったり、自分の担当の子ではない時には、「○○ちゃんは、誰れ先生の子なの、先生と遊びなさい」などと言う。子どもたちが、私たちがみたい10日間だけのお姉さんになってしまうのに、やきもちをやいていたのかと考えたが、もしそうだとしたら、なんだか情けなくて、かわいそうにさえ思えてきてしまった。そして反省会では、「あんまり幼児さんと話しているところを見かけませんでした。もう少し近づいた方がよかったんじゃないかと思います」などといっているのが驚ろいた。

先生方には、先生方の立場があり、実習生には、実習生の立場がある。互いに相入れない状況の中で思い悩む学生の姿が眼に浮かぶ。

次の学生の感想は、深刻である。日誌とは何なのかを強く考えさせられるケースである。

ハ) 私の実習録は、子どもの活動報告書ととられていたようにも思えなかった。先生はほとんど事務所におられ、私の実習録に対しては「今後～を注意していきたいと思います」、「子ども達には、いい加減なことを言わないように注意しました」という評がかえてきたのである。10日間の実習録を読み返してみると改めて、「実習生はどこにいればよいのだろう」という想いとらわれる。

こうした形での日誌利用というのがあるんだ、と漠然と思った。しかしこれでは、学生は何も書けないではないかと、次に思った。

「実習生はどこに……」は、これまで様々な意味で、多くの学生が語ってきた。おそらく、養成側はこの問いに答えることはできない。答えは、実習生としての学生にまかされている。

ともすれば、実習生は弱い立場であり、園の指導方針に従うようにと、養成側ではいいがちであるし、その他

の言葉をもっていない、もってはいけないうにも思える。しかし、現実にこのような実習生の発言を前にして、なんと答えたらよいのだろうか。

ニ) 園長先生は“子どものことを第一に実習を”ということは何度もいわれていた。“子どものことを第一に=子どもに直接かかわらない、洗濯、掃除を第一に”という事だったような気がする。あまり思い出したいくない10日間である。ひとつだけ、どうしても忘れられない事がある。中2の女子が、保育室へ夏休みの宿題でミシンを使うためにきていた。私と他校の実習生が仕事をしていて、一緒に保育室でしゃべりながら居た。その事を、“どうせ、子どもとしゃべりたいと思って実習しているんだから”というような事を言われ、注意を受けた。“あー、この園では、子どもとのかかわりをもてはいけななんだ”と私は思った。もう、実習中は子どもとかわりたいたいという気持ちもどこかへ行ってしまった。保育実習ではなく、洗濯実習に行ったようである。先生方も園長先生への不満を、実習生の前でしゃべったりしていた。そんな先生方の冗談まじりの園長先生への批判も、聞くのが楽しみになってしまった。それほど嫌な気持ちになってしまった。

こうした実習後の感想は毎年聞いているところである。「洗濯と掃除以外、なんにもしなかった」、「子どもとふれあうことがなかった」等々。施設側の事情もあることであろうが、実習生としてはなによりも“子どもとふれ合いたい”ということが、第一目標であるように思うし我々としても“子ども理解”ということ、学生たちに何とか伝えたいと努力しているところでもあると思う。

その中で、子どもとふれ合うことのできない実習とは学生にとって、どのような意味があるのだろうか。

しかし一方では、今年の夏、実習のご挨拶に伺ったおり耳にしたことの多くは、学生たちの子どもとの対応以前の問題ばかりであった。

「ぞうきんがしぼれない」、「電気釜をガスコンロにかけようとしていた」もっともこれは、本学の学生ではなかったが、学校教育以前の話題が多かった。

時代を考えなければいけないと思った。

施設の実習にいて、はじめて洗濯機を使った学生もいた。竹箒を、風上に向かって掃いた学生もいた。靴の脱

ぎかたも知らなければ、スリッパも揃えられない。

そうした学生たちに、何を、どう伝えればよいのだろうか。子どもにふれたい、しかし、洗濯と掃除の実習だった。こうした語りを聞きながら、これから我々は、何をすべきなのか、と強く思う。

ホ) 実習生に対する先生方の態度でも気になったことがあります。実習生は、施設では先生方の忙しいところに入って、邪魔な存在だとは思いますが、その態度を露骨に示されると私たちの方が困ってしまいます。

我々は、ついいってしまう。「君たちは、たった10日間を通過する人間である」と。学生たちに、その言葉がどれほどの重さになるか、分っていないが、後輩を育てようと考えて下さる園もある。実習生はお手伝いさんであると考えている園もある。その間の中で実習生は生きている。

ニ) 何の実習だったのだろうか。何を得たのだろうか。そんなかんじの実習だった。洗濯と掃除の記憶が大部分で、子どもと触れ合ったことは数えるくらいしかなかった。

こうした言葉を、どうとらえたらよいのだろうか。

(3) 職員と職員との関係

イ) やはり、保育者同志でも仲間割れがあるのですね。驚きました。私達実習生がそばにいても、平気である先生の陰口をみんなで言い合ったり、おまけに副担任まで口をそろえているのです。噂のその先生は、私が実習に入って、最初に良い先生だなと思っていた先生なので、次回から見方が少し変わってしまいました。

ロ) 保育という女性だけの職場においての人間関係の難しさ、社会に出て働く上で一番難しいのは人間関係なのだと、感じさせられたことです。それが、この実習で一番勉強になったことだと私は思っています。

実習生だけでなく、幼稚園・保育園・施設、そして企業に就職した卒業生たちの多くが語る言葉である。

「人間関係」、古くからいつくされてきた問題である。しかし、最も新しい問題といえるのかもしれない。なにに派というものが園にあり、その派閥争いに実習生が引き込まれそうになったという話も聞いた。しかし実習生は実習生である。その中で、どうやりくりするかは、実習生個人の問題になってしまっている。

(4) 施設・設備に関して

汚たない、異臭がする、などから始まり、蚊が多いなどに至るまで、実習生の施設に対する不満は数限りない。

イ) 食事はとてもお金の払えるようなものではなかったです。それは、下町の大衆食堂のサンプルが、ほこりをかぶって色がよくわからないというような感じで、食べれば、肉はゴムのようだし、ごはんはにぎる前からおにぎりのようで、あの食事に400円はとても合わないと感じたのでした。

そして、これだけは絶対にいいたいというのは、交通費のことです。片道だけで、学割を使っても、1万円を越すのです。何の為の授業料だと言ってしまいたくなります。全額とはいませんが、何らかの基準を決めて、涙位の補助はだすべきです。

家庭の近くに実習に行く学生、はるかに遠くに行かねばならない学生、さまざまである。

施設での実習は、その昔、涙なくしては語り得なかったし、多くの学生が、体重を落して帰ってきた。

今は、適度の運動量、規則正しい生活、カロリー豊かな食生活の中で、体重を増して帰ってくる。返えて、この様な感想を述べる学生の方が少ない。しかし、交通費の問題は解決できないでいる。

(5) 日誌について

この実習での実習録は、まさに地獄の苦しみでした。何度これさえなければと思った事か。それも、思った事をありのまま書けるならまだしも、担当の先生、園長先生に不快感を与える事のない様、言葉を選び、当たりさわりのないように書いていかなくてはならないので、それがなにより地獄の根源でした。本音というものは、とても大切な事だと思います。一生懸命書いた実習録ですが、処々にウソがあるというのは、とても淋しい事です。

「実習録には、絶対、園側を批判する様な事は書いてはなりません」という学校側の言葉はしょうがないと思いつつも、矛盾を感じます。

「実習日誌さえなければ……」という声の裏には、大きな重圧を、養成校の側が与えてしまっているようである。しかし、10日間だけの実習ということ、受け入れ園側の心証、その結果としての実習生の指導というように考えると、何を書いてもよいとはどうしてもいえないのが現状なのではないだろうか。受け入れ園と、養成校の間に、密なコミュニケーションがあれば、こうした状況も、いくらかは緩和されるであろうか。

(6) 配当について

掲示で実習先を知らされた時、ひどく落ちこんだ。精薄施設だったからである。保母資格をとるためには、施設での実習も必要であると知ったときからは、絶対に精薄施設だけは行きたくないと思っていた。学内でのオリエンテーションと前後して、去年の先輩方が残して下さった資料をみて、私は一層落ちこんだ。対象は児童だと思っていたのに、成人をやらされるなんて。しかも、男性を担当するかも知れないなんて。

実習先は、必ずしも本人の希望通りにはいかないと分かっていたても、こうした学生は毎年あらわれる。過去には、泣き泣き重いバッグをひきづり、実習に出かけた学生もいた。しかし、この学生の場合は、実習前と打って変わった笑顔で無事に帰ってきた。充実した実習だったという感想をいだいて。

実習の場は、「自己変容の場⁶⁾」であるという。学生の若い思い切りのよさに期待してしまうのは、学生にとっては、酷なことであろうか。

(7) 実習日誌に書けなかったことや、書けなかった学生について

イ) 実習中、ちょっと気になったり疑問に思ったことがあると、「いいんだあ。このことを宿題のレポートに書いてやるんだ」などと、心の中でつぶやいたりすることによって、いつのまにか気分転換をするようになっていました。ですから、書くことがたくさんあったはずなのですが、子どもたちがいとおし

くなっただけはもちろ、保母、指導員の皆さんには最敬礼の思いになり、書こうと思っていたことが、なにもかも消えてなくなりました。

ロ) 実習日誌に書けなかったことというのは、私にとって特にありません。施設実習は楽しくて、完璧だったと思っていますし、保育所は、とりあえず2週間こなしたという最低の実習態度でありながらも、自分なりに信念を通したと思っているからです。

この他にも、おそらく「気づかない」ということで書けなかった学生もいたことだろうし、書くことはあるがレポートに仕上がらなかった学生もいることだろう。自分自身を表現してもらうことの難しさを感じる。

おわりに

こうして考えてきてみると、つくづく難しいテーマを学生に与えたものだと思う。そのレポートを素材にしたのはいいが、論旨に不分明な面が多く、まとまりのつかないものとなってしまったようである。

それは、「日誌」にテーマをあててはいるが、書かれた内容が多様であること。レポートを選択するにあたっての基準として、筆者がなにかを「感じた」ものであったことによると思う。

こうしたかたちで、数年眺めていけば、もう少し違った“その時代の学生”というものがみえてくるのかも知

れない。しかしそれすら、その年の学生の個人差、クラスの雰囲気、さらには学生と受け入れ園との相性等々、必ずしも毎年このような「書けなかったこと」があるとは思えないし、「タタマエ」を書かれても意味がないように思う。

「実習」ということだけではなく、さまざまなところで、学生理解を深めていかなければならないと、強く思う。

註

- 1) 三角同：私の授業実践―「養護原理Ⅱ」を中心に 全国保母養成協議会第25回大会発表要旨集所収、1986
- 2) 三角同：子どもと福祉、橋口英俊編、児童発達の心理学、小林出版（川崎）所収、1982
- 3) 阿部和子・大場幸夫：保育実習の展開―(2)、実習日誌をめぐって、全国保母養成協議会第23回大会発表要旨集所収 1984
- 4) 沢木耕太郎：おばあちゃんが死んだ、同著、人の砂漠 新潮社（東京）所収、1980
- 5) 三角同：保育実習の諸問題―「実習日誌に書けなかったこと―日本保育学会第41回大会発表論文集所収、1988
- 6) 教育・保育実習を考える会編：施設実習の常識、蒼丘書林（東京）1982